

5-2		主題	スライドボード・スライドシートを活用し抱えないトランスについての取り組み	
スライドボード		副題	安全・安心で楽にトランスを行う	
トランス				
研究期間	6ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム 大洋園	
発表者：介護職員 井上峰奈（いのうえみな）			アドバイザー：生活相談員 中村雅俊	
共同研究者：介護職員 市倉記子				
電話	0428-31-3666	メール	tokuyo@taiyoen.or.jp	
FAX	0428-31-3642	URL	http://www.taiyoen.or.jp	

今回発表の事業所やサービスの紹介	東京都の西端、青梅市という緑と太陽に恵まれた地域で、昭和59年5月に100床の特養として根をおろし27年。現在、160床のベッドに加え同市内に多くの在宅サービスを多元的に提供し、地域福祉の貢献に日々全力でとりこんでおります。
------------------	--

<p>《研究前の状況と課題》</p> <p>1グループ26名前後を、6つのグループに分け対応しており、平成23年6/1現在、平均介護度4.1、トランスにおいての全介助率は70%となっている。5年前では平均介護度3.7、全介助率は55%であった。</p> <p>全介助率が上がるだけでなく、体が大きい方が増えたことで職員への負担が増加している。時間に追われゆとりをなくしてしまうことにより事故等も発生している。</p> <p>腰痛予防を行なっているも、トランス時や排泄介助時に腰痛を起こすことがあり職員の49%は腰痛を抱えている状況である。</p> <p>そのため、介護負担を軽減し事故を減らせるようまずはトランス方法から見直していくことを考えた。</p>

<p>《研究の目標と期待する成果》</p> <p>外部研修にて、スライドボード・スライドシートを使ったトランス技術を学び、従来の『抱えるトランス』から『抱えないトランス』へ移行しトランス方法の改善に取り組んだ。</p> <p>スライドボードとは座位で横に移乗するための橋渡しをする板で29cm×61cm（¥12,600）、スライドシートとは内側が滑りやすい素材でできた筒状のシートで75cm角のナイロン製（¥2,625）でベッドと車椅子の高低差を活用し、スライドボードの上を滑らせることで抱えることなく、大きな力も使わず移動することができる。『抱えないトランス』を行うことにより、介護負担の軽減や腰痛防止ができ、また、意識的にゆとりを持って、安全確認をしながら臨むことでトランス時に発生する事故が減らせるのではないかと考えた。職員、利用者共に安全・安心で楽なトランスを行うことを目標とし、トランス技術の向上、腰痛予防、事故防止等を期待する。</p>
--

《具体的な取り組みの内容》

- ① 介護職員に対してスライドボード・シートを用いた内部研修（2回・参加人数40名）を行い職員同士で介助者・利用者の体験をした。
- ② 利用者を相手に実践介助を行い利用者の身体的状況を把握、また、車椅子のアーム・フットサポートが外せるもの、ギャッジベッドであるかを調査する。
- ③ 車椅子やベッドの環境整備を機能訓練指導員と共に、検討及び変更を行った。
- ④ 2グループの利用者の中からリクライニング式車椅子使用者、体が大きい片麻痺の方を相手に実践介助を行っていき、介助者や利用者の声を聞きメリット・デメリットを検証した。
メリット：職員、利用者共身体的負担が軽減、無駄な力が不要、2人対応の方も1人で行える、リスクに対する意識向上、腰痛予防等。
デメリット：準備に時間を要す（普通型車椅子では従来のやり方で1分程度、ボード使用で2分程度、リクライニング式車椅子では、従来2名対応で行い2分程度、ボード使用で4分程度時間を要す）、転落のリスクが高まる、他の緊急時対応が遅れる場合がある、車椅子やベッドの構造上使用困難なことがある等。
- ⑤ 2グループが慣れて来た所でボードとシートを1枚ずつ増やし効率を上げ取り組んだ。

《取り組みの結果と評価》

実践していく中で不安を抱える職員も多かったため、始めは指導者を置き、指導者の元で介助を進めていった。実践を重ねていくうちに、職員間でのアドバイスがあり、介助に対する不安が軽減され、自信に繋がった。慣れてくるとデメリットと感じていたセッティングの時間があまり気にならなくなり精神的にゆとりができ、身体的負担の軽減も大きく実感した。利用者も始めは不安な表情を浮かべていたが、コミュニケーションをしっかりとることで不安は軽減され、事故等の大きな混乱もなく安全・安心で楽にトランスを行うことができた。

《まとめ》

スライドボードには、車椅子やベッドが合わないものもあり、使用するには困難な場合も多く環境改善が必要と考える。

職員1人1人、スライドボードを使ったトランス技術を身につけるにはまだ時間が必要だが、今後も仕事を継続していくには身体的負担を軽減することは大切と考え、ゆとりのある介助の元、安全・安心で楽な介護が行なえるよう今後も取り組んでいきたい。

また、今後入職する職員にも内部研修や実践を通して、技術を身につける機会を設けていく必要がある。

《参考文献》

富岡公子（2007年）：産業衛生学雑誌 福祉用具の有効性に関する介護作業負担の比較研究

《提案と発信》

現在、特別養護老人ホームの在り方が問われており、介護の重度化に伴う職員の身体的負担が増しているため、今後も、身体を守りながらより長く介護職を続けられるよう取り組んでいきたい。

【メモ欄】